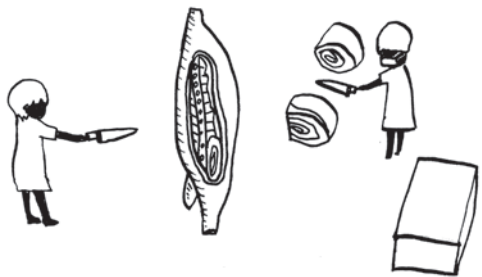


ク □ 新 聞

農道を自転車で行く。黒鳥小学校、化学工場の白いタンク。化学工場で事故があった時は少シラクワクした。九時五〇分集合に間に合いない。一〇時、十分前の十分前めがけて出発すべきだったのだ。田園に居座るゴミ焼却場、プールのあるスポーツ施設、以前、ヨガ教室に通っていた。近所で見慣れた景色を通りすぎる。新潟市食肉センターがあらわれる。見学に誘ってくれた市民映画館シネ・ウインドボランテアスタッフのIさんと、同じくシネ・ウインドのI支配人はすでに到着している。I支配人が手を振って招いている。敷地に入る道路のくぼみに水たまりができている。屠畜解体を行っている巨大な建物の離れにある、小さな管理棟へ。ごく一般的な事務所で三五人くらいが働いている模様。やはり小さな会議室で事務局長のTさんが解説を始める。カラー八ページのパンフレット、パワーポイントでつくったレジュメ。モノクロであることを詫げる。パンフレットをみるも、一日あたり屠畜能力大動物三〇頭、小動物九〇頭とある。Tさんによると大動物とは牛とくまれに馬、小動物は豚、まれに山羊、羊などらしい。半年ほどで一〇〇キロにもなる豚が小動物とは不思議な言い回し。食肉センターの建設工費費は約六五六万と書いてあり、えっ信じられない激安じゃん。いつの時代？と驚くも、よ

くみたら六五六〇〇〇千円！約六五億六千万円だった。平成五年に開設。(公財)新潟ミートプラントが指定管理者として運営している。業務内容によって、新潟ミートプラント(屠畜、解体、冷蔵保管)、新潟臓器有限公司(内臓処理、新潟ミートパッカー(株)(部分肉処理))と分かれている。パンフレットとレジュメを駆使して説明してくれるTさん。平日の昼前、小さな事務所の会議室におじさんが四人。天気が良い。どんなにためになる話でも、おじさんが話しているだけの状態がつづく、どうやら眠くなってしまった。チョムスキーの映画を観たときもすぐに寝てしまったっけ。(幼少の頃、保育所から歩いて豚小屋へ行く。豚の絵を描くのだが、臭くてつまらなかった。その頃は嗅覚が鋭かった。豚小屋の近くを通るだけでも苦痛だった。豚小屋の中は暗くて、豚は巨大だ。数年後、豚小屋の前を通る。郷愁のようなものを覚え嫌な感覚はなくなっている。道路の反対側、用水路をみるも、黒ずんだ豚の亡骸がブカブカと浮かんでいた。)Tさんの話は牛と豚の屠畜数の比較に。年間屠畜数は豚約二二万頭に對して牛約一〇〇〇頭と二〇〇倍の差がある。新潟は豚の消費量が多く、反対に牛の消費量がとても少ないらしい。(畜産農家の多い集落、信号のないまっすぐな道を車で走る。大きな犬が前方をてくてく

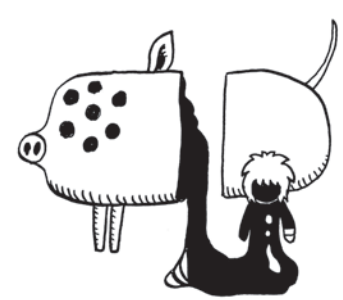
と歩く。周りは田んぼ。「バスタップ!」と書かれた大きな看板。犬にみえたものは近づいてみると豚だった。)シネ・ウインドのIさんとI支配人は時折質問をしている。僕は気になる部分がありつつも事務局長Tさんの解説が終わるのを待つ。新潟の屠畜場は新発田と、こと、長岡の三つ。村上牛などブランドの良い肉は新潟にはあまり出回らず、首都圏で高値で取引されるらしい。(夜の畜舎に牛が並ぶ。しっぽをあげるのは警告。大量の糞がひりだされ僕はかっぱく。牛糞はベルトコンベアに乗って一箇所にたためられ、堆肥として利用される。老人の顔を持つ小柄で快活な男の指示で搾乳する。筒状の器具が牛の乳房に吸いつき、自動で乳を搾りとりつくれる。)事務局長の話は家畜の生産過程に。豚は半年。牛は三〇ヶ月で出荷される。肥育牛とは和牛らしい。(そうなのだろうか。たしか酪農家は牛の乳を出すために和牛の種をつける。産まれるのは和牛とホルスタインの混血。F1とかいってたっけ。)パンフレットに解体処理の流れがイラストで描かれている。牛と豚の亡骸はコンカルに目が×(パツテン)で表現されている。元々、今回の見学はシネ・ウインドで映画『ある精肉店のはなし』が上映されたのがきっかけ。屠畜の現場、家畜の生命をいただくというところに重



きがあつたのかもしれない。今回、肝心の屠畜解体の現場は見学不可であったものの、話がようやく屠畜の過程におよびIさん、I支配人は色々質問していた。豚は追い込んで電気ショックを与え、血を抜いて殺すらしい。僕が今日の見学に参加したのはクロ新聞(この冊子だ)をつくるため。近所だし記事にするのに度良いと思ったのだ。格別、屠畜解体に興味があつたわけでは無い。みてみたい気持ちはあるけど近でみたらきつとショックを受けてしまうだろう。それでも、もし屠畜

解体を間近でみたとしてもチャーシューを食べている時に豚の命をいただいていると感覚的に捉えられようになると思える。想像力と慈愛の心が欠けているのかもしれない。(国道七号線。モーター車に入る道のもっと先に行く畜産農家がある。牛舎から少し離れた事務所の前、大勢の人が集まる賑やかなパーティ。三味線の演奏。聞かなくな

間が経過し質問する時間は無さそう。パンフレットに載っている施設の写真、懸肉室に豚の半身がぶらさがっているの以外はからつぽの写真ばかり。実際、これらの器具・装置を使つてどのように作業が行われているのか想像するのは難しい。電撃から枝肉整形まで四〇分で行うため器具は密集して配置され移動時間を短縮しているらしい。



いよいよ作業現場を見学する。枝肉(たぶん豚の血を抜き内臓を取り皮を剥いで半身にしたものと思われる)を部分肉(たぶんバラ、ロース、ヒレなどの部位)に分けるところだけが見学を許可された。撮影は禁じられカメラを置いていく。管理棟から出て部分肉処理を行っている建物の冷蔵庫の前を通ると肉を吊り下げフックがカラカラと音をたてて流れている。事務局長Tさんは長靴を消毒液に浸けている。僕はサンダルなのでどうしたものか思っている。部分肉処理室に入るドアの窓は、オレンジ色に貼つて入ってくる。好ましく感じる。階段を登ると見学室。ちゃんと見学室と札がついているのだから見学者を受け入れることを念頭につくられたのだろう。一面ガラス張りを見らるすと一階の広い空間で部分肉処理が行われている。奥に半身の豚がぶらさがつてい

て、その肉を二〇人くらいの白い制服を着た人達が刃物一本で切り刻んでいく。肉体労働に従事している人々によって生物の死体が手際よく切り刻まれていく。不謹慎かもしれないがとてもおもしろかった。美しいと思つた。特に人の動き。熟練された職人の動きはスピーディーで無駄がなく、リズムカナルな舞踏のようなあれほどの素早い動きで仕事をこなし、なおかつ一日中、ないしは数時間間に渡つて動きつづけるというのはずかいことだと思ふ。特に動きの速い二人を食い入るように見る。細かく、おそらく正確な動きを早送りのような速度で行つている。数十人の人々が豚の半身から部位を切り取り台の上で皮を剥ぎ筋を取っている。白い服にマスクをした集団と切り刻まれていく肉片。全体の光景もおもしろかった。事務局長Tさん、Iさん、I支配人が何か話しているけど何も頭に入つてこない。映画を観るのともパンフレットを見ながら話を聞くのと違う。生で見る現場にただ格好良い光景をみておもしろがっているだけだった。浅い人間なのかもしれない。切り刻まれる豚の半身の亡骸と白い服で小刻みに素早く動く人達はおもしろくて格好良い。それだけなのだ。見学は短時間

で終了。もつとずつとみていたかつたが、満足した。見学に来て良かった。同じ敷地内にある新潟市食肉衛生検査所へ。こちらは国の機関らしい。時間が押しているようで早々にビデオを観る。映像には案内人としてミート博士と、ミンミンというチャイナ婦人の女子、どちらも二頭身のドット絵キョウラクターだ。実写(静止画)と合成されている。ビデオといつても動画はなく静止画をつないで、ミート博士とミンミンがカクカク動くだけ。台詞を言う時も博士もミンミンも口すら開かない。アニメにすらなっていない、デジタル紙芝居だ。時折ミンミンが鋭い発言をするミート博士が「ジャストミート」と叫ぶ。そこだけは念入りアニメーションがつけられている。屠畜解体作業の流れが解説されるが、やはりみていると睡魔が襲ってくる。(原つぽで仔牛の死体を焼く青年は奴隷解放宣言を行つた米大統領の名を冠した車を欲しがつた。金払いの悪い馬喰の家横にある小さな畜舎に仔牛用の粉乳を運ぶと猛犬が襲い掛かってくる。山を越えると一〇〇〇頭もの牛がひしめき合う牛舎の事務室に半分が白髪物静かな塾年女性が座つている。口蹄疫が人々を恐怖に陥れ侵入者を阻む。)ビデオが終わった。質問はないかと尋ねられた。こちらは検査する

機関で、僕の質問はさっきの管理棟  
でするべきだったのかもしれないが  
確か二つばかり質問した。

「新潟市がこういうことを完全に管  
理してはるわけですか？」

「新潟市の食肉センターで新潟市の  
持ち物なんですよ。だけど搬入され  
る牛・豚は新潟市外からも来ます  
し。出荷される豚も新潟県外に行く  
こともあります。」

「ここは別に利益を出してるところ  
ではない？」

「利益はですね、解体手数料をいた  
だいてます。あと冷蔵庫の使用料。

検査所であれば検査手数料。稼いで  
はいます。お金の話になると難しい  
んですけど、全ていただいたお金だ  
けで運営しているわけではありませ  
ん。税金もちろん使わせていただ  
いています。」

「そうですよ。肉というものを市  
場に出して、みんなが食べられるよ  
うにするってことに税金が使われて  
いるってことですよね。」

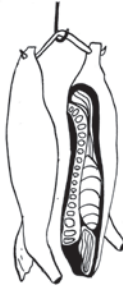
「昔はどうだったんですかね。」

「ここができてもう二年になりま  
すけど、その前は詳しくはわかりま  
せんけど、前は小新にありまし  
たし。その前は：昔は新潟の競馬場が  
開屋の方であって、すごい昔。こ  
「遡れば個人個人がやっていたこと  
なんですかね。それがいつからか新  
潟市が食に関わることだったというん

でやられてるってことなんですか  
ね。」

「成り立ちの部分はちよっと。」

ビデオを見た部屋には実物大の豚の  
模型が置いてある。胴の真ん中に切  
れ目が入っていて中身が見れたりす  
るのかと思ったが、運びやすくする  
ためだけのものらしい。見学が終  
わった。実際の現場を生で見れたの  
が一番おもしろかった。帰り際、I  
支配人に「絵に描けそうですか？」  
と訊かれた。「記憶だけでは無理で  
す。」と答えた。



### 編集後記

●先日、クロ崎は、ふるさと村、アイヌ保存  
会の公演へ。会場は老男女で満席。床に座っ  
て観ていた。●同じ日に、味噌のイベントを  
やっていて、全身茶色タイツの男性や、和風  
ミニスカートを履いたミソガールが頑張っ  
ていた。●味噌球（自家製即席味噌汁）づく  
り体験に参加したら、はずれなしのクジで市販  
の味噌をもらう。大盛振る舞いに驚く。●あ  
と、ちよっと前に『田舎の生活』という旧朝  
日村のフリーペーパーを知り。度肝を抜かれ  
ました。

クロ新聞 二〇一四年 六月号

発行所 **クロ新聞工場**

〒950-1122  
新潟県西蒲原郡黒埼町大字木場

090-6141-8386

karafutoneko@gmail.com